歴文クラブ３０年７月研修会

比叡山延暦寺を訪ねる
―最澄と南都仏教―

実施日：平成３０年７月１０日（火）

資　料

１、研修会実施要領

２、資料

①宇治田原を行く（八木）

②坂本の地形・歴史（田代）

③穴太衆の石積み（田積）

④最澄と南都仏教（羽尻）

３、出席者名簿

奈良･人と自然の会
歴史文化クラブ

担当世話人：八木順一、羽尻嵩、田積彰男、田代一行

連絡先：古川（℡　090-4298-2344）

≪実施要領≫

１、実施日：平成３０年７月１０日（火）　雨天実施

２、集　合：近鉄大和西大寺駅南口　８：００

３、行程スケジュール

西大寺駅出発（8:00）⇒禅定寺（8:50～9:35）

⇒坂本生源寺　(10:25~10:55)

⇒滋賀院門跡（11:00～11:15）

⇒（比叡山ドライブウエイ）展望台

⇒延暦寺東塔地区（11:50～13:50）

（昼食・拝観：大講堂・根本中堂・戒壇院など）

⇒西塔地区（14:00～14:50）

（拝観：浄土院・釈迦堂・にない堂）

⇒横川地区（15:10～16:00）

（拝観：横川中堂・元三大師堂）

⇒帰途（16:00～）⇒西大寺駅着（17:30 予定）

歴文７月資料①

By 八木　順一

宇治田原町を行く

１　お茶の話

宇治田原町でお茶の栽培が始まったのは鎌倉時代。鷲峰山の麓、大福谷の奥地でお茶の種が植えられたということです。また、現在日本で日常的に飲まれている緑茶もここ湯屋谷がその発祥の地と言われています。

そして江戸時代、ここに住む永谷宗円が製法を研究し、農民が飲む粗末な茶が色・味・香りに優れたすばらしいお茶になりました。

この後宗円は、江戸に上り、茶商山本嘉兵衛（のちの山本山）を通じてお茶を販売。彼のお茶は「天下一」と呼ばれ全国に広がったといわれています。

２　徳川家康の伊賀越え

天下統一を目前にしていた織田信長は１５８２年６月２日に滞在していた京・本能寺で明智光秀の襲撃に会い 生涯を閉じました。当時信長の招きで堺に逗留していた徳川家康は、上洛の途上でその事実を知り、いったんは　信長の後を追う覚悟をしたものの家臣に止められ、急ぎ領国まで帰ることにしました。随行する家臣の人数が少ない中、明智方や一揆の襲撃におびえながら、大阪の枚方から山城（現在の京田辺）に入り、「草内の渡 し」で木津川を渡りました。

家康一行は、市辺（現在の城陽市）を経由して宇治田原に入り、山口城で昼食をとったといいます。やがて馬を換えて出発し、当時山城と近江を東西に結ぶ「信楽街道」が通過する立川、湯 屋谷を経て奥山田に入りました。国境の裏白峠を越えて朝宮に入った家康一行は、多羅尾氏の小川城に入り、 一泊したといいます。

３　禅定寺

このお寺は、天下に遍く知られたといった有名なお寺ではありません。しかし地元南山城の中では、南山城六山の一つとして数えられます。寺院としての正式名称は、白華補陀落山観音妙智院禅定寺（びゃくげ ほだらくさん　　かんのん みょうちいん ぜんじょうじ）で、創建当初は華厳宗（けごんしゅう）の寺院でしたが、現在は曹洞宗です。

正暦２年（９９１年）東大寺の別当であった平崇上人によって開基され、造営に五年の歳月を費やしたと伝えられています。

平等院の末寺となり、藤原氏の庇護によって「岨山一千町歩」などの広大な寺領を有していましたが、

中世以衰退降はし、境内の荒廃が進んでいました。そんな中、延宝８年（１６８０年）加賀国大乗寺の月舟宗胡が、禅師に深く帰依していた加賀藩の家老・本多安房守政長の経済的援助を得て、諸堂を建立し、境内の再　整備を行い、　曹洞宗寺院として復興しました。現在の境内は月舟によって再興された当時のようすをよく残しており、本堂・客殿は現在も町内で最大の茅葺き屋根の建築です。

宝物殿には、重要文化財や町の文化財に指定されている 木造十一面観音立像をはじめ十体の仏像が安置され ています。他にも、境内には町指定文化財の禅定寺五輪塔や、防災壁に描かれた巨大な現代の大涅槃図があり、京都府総合資料館には、中世の研究資料としても貴重な重要文化財「禅定寺文書」が保管されています。

４　猿丸神社

「奥山に 紅葉ふみわけ 鳴く鹿の 声聞くときぞ 秋はかなしき」

この歌を詠んだ猿丸大夫を祀ります。

三十六歌仙の一人 に 数えられていますが、謎の人物。この地は、大夫晩年隠棲の土地とも伝えられています。また、　猿丸神社は瘤、でき物取りの神様として信仰が厚く、

毎月 13 日に行われる例祭と「猿丸市」には大勢の人出で賑わいます。

以上

歴文７月資料②

By：田代

大津市坂本について

１、地形と歴史

坂本は、比叡山に源を発する大宮川や、藤木川(権現川)の扇状地にあり、前面に琵琶湖が広がる風光明媚の町である。　比叡山東麓、琵琶湖西岸に位置する陸湖交通の要衝地であり、また比叡山日吉社の門前町として発展し栄えた中世都市であった。

比叡山麓には古墳時代後期の古墳群が多くみられ、日吉大社境内には日吉古墳群(6～７世紀)があり、渡来系氏族の古墳と考えられている。因みに、最澄(伝教大師)も、渡来系氏族の末裔と考えられている。

中世の記録では、北国海道と比叡山への道が交わる比叡辻や富崎（現下坂本６丁目付近）に、「**馬借**」「**車借**」の運送業者が集住。土蔵、酒屋など金融業者や問丸（といまる）など運送に携わる商人も多く見られ、門前町であるとともに日本を代表する経済都市へ成長したとされる。

享永６年(1434 年)、延暦寺の大衆(ダイシュウ)(仏僧集団)が室町幕府と対立したことから**足利義教**（あしかがよしのり）は、坂本を攻撃し、町は兵火で焼失した。その後、徳政令を要求して土一揆が発生した。これらは、坂本が幕府に対するくらいの力を持っていた事を示す出来事であった。

その後、元亀２年(1571 年)　**織田信長**により比叡山焼き討ちで山上山下とも壊滅的な被害を受け、さらに**秀吉**により船運の拠点は大津へ移転、港町としての役割を終えた。

２、江戸時代の坂本の機能と「公人」

延暦寺日吉社の復興は、秀吉の時代から始まり江戸時代に完成する。

坂本の街並みは、中世の道や社をそのままに復興したと考えられている。山下での僧侶

の住居がある里坊や、日吉社の社家、宮司が住む空間や大工、屋根屋の職人など山上山下の日常生活支える商人など生活の場がつくられていった。

延暦寺の経済力は、坂本や下坂本など 5 千石が認められただけで、往時の力が復活することは無かった。

この町独自の制度として、**『山門公人』**（さんもんくにん）と呼ばれる集団があり、俗人でありながら得度して延暦寺支えていた人々を指した。

延暦寺は三塔一六谷に分かれ、それぞれ院や坊が有り、山門公人は、その院や坊に所属し年貢の収納や仏事など諸事を担っていた。延暦寺の運営を滞りなく進める事が**公人**の役割で、その存在は坂本の安定に大きな役割を果たしてきた。公人屋敷では、当時の公人たちの暮らしぶりを知ることが出来ます。

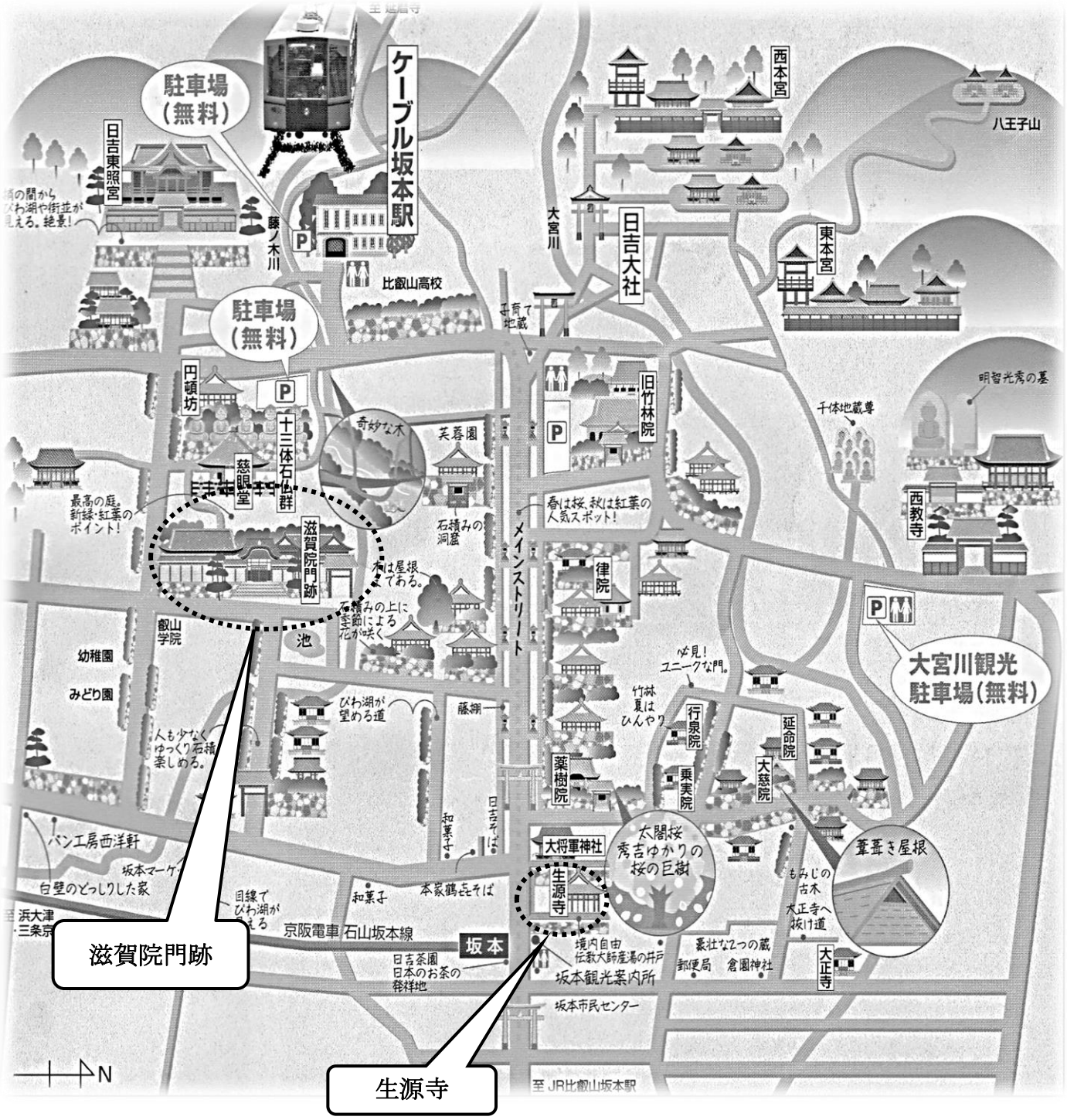
（注）

※馬借（ばしゃく）：平安～戦国時代　馬を利用して物資を輸送した運送業者

※車借（しゃしゃく）：牛車で物資輸送を業とした者で、馬借の補助的な運送業者

以上

日吉大社・坂本　案内図


駐車場（無料）
ケーブル坂本駅
日吉東照宮
藤ノ木川
比叡山高校
駐車場（無料）
円頓坊
十三体石仏群
慈眼堂
奇妙な木
芙蓉園
最高の庭。新緑・紅葉のポイント！
滋賀院門跡
石積みの洞窟
木は屋根なである。
石積みの上に季節による花が咲く
池
叡山学院
幼稚園
みどり園
びわ湖が望める道
藤棚
人も少なくゆっくり石積楽しめる。
パン工房西洋軒
坂本マーケット
白壁のどっしりした家
目線でびわ湖が見える
和菓子
本家鶴喜そば
日吉そば
京阪電車 石山坂本線
坂本
日吉茶園 日本のお茶の発祥地
滋賀院門跡
生源寺
大宮川
日吉大社
西本宮
八王子山
東本宮
子育て地蔵
旧竹林院
メインストリート
春は桜、秋は紅葉の人気スポット！
律院
千体地蔵尊
明智光秀の墓
西教寺
大宮川観光駐車場（無料）
必見！ユニークな門。
竹林 夏はひんやり
行泉院
延命院
薬樹院
乗実院
大慈院
太閤桜 秀吉ゆかりの桜の巨樹
大将軍神社
生源寺
葦葺き屋根
もみじの古木
大正寺へ抜け道
境内自由 伝教大師産湯の井戸
坂本観光案内所
坂本市民センター
郵便局
倉園神社
大正寺
N
至 JR比叡山坂本駅

歴文７月資料③

「生源寺」・「穴太衆」

By：田積

1、生源寺(しょうげんじ)

奈良時代後期、最澄(さいちょう)(767-822)によって開山されたと伝えられている。最澄の生誕地といわれ、延暦寺の中でも特別な霊地として崇められている。

山門のかたわらに「開山伝教大師御生誕地」の碑がある。そして、山門を入ると右手の大きな古木の下に古井戸があり、最澄の産湯といわれている。また、隣接して別当大師堂があり、最澄の誕生年月日についてはいろんな説があるが、生源寺では毎年 8 月 18 日に盛大な誕生会が行われる。

2、穴太積(あのうづみ)の石垣

滋賀県大津市坂本は，比叡山延暦寺と日吉大社の門前町 として発展してきた。その坂本の町並の大きな特徴に里坊と，石垣がある。 この石垣は穴太積み石垣と呼ばれ，穴太の地に居住した穴太衆により積まれたものであ る。

自然石をあまり加工せずにそのまま巧みに組んで高く積み上げ，その上に白壁塗りの土塀や，生垣，竹垣， 木柵等を配し，主屋や庭園を囲む美しく堅固な石垣である。

室町時代末から戦国時代の戦にともなって、各地で石垣を築く城郭がつくられ、その際、穴太集団によって独自の石垣が生まれた。その石垣は全国の城郭の石垣として今日見ることができる。

とくに坂本には、比叡山の里坊として塔頭が数多く残っており、いたるところに美しい石垣を見ることができる。穴太積みの石垣は、野面積み(のづらつみ)とも言われ、加工していない石(自然石)を積み上げる方法で、石垣の外観は乱雑な感じが見られるが、石垣としては非常に堅固である。 石の大きい面を内側に押し込み、その内側には小さい栗石を入れ、さらにジャ

リを詰める方法で排水面も優れている。

穴太積の特色は、

・自然石を使う。自然石には大石・中石・小石を用いる。

・自然石には、奥行きのあるものを用いる。

・石面の合端（あいば）合せに二番を使う。

（注）

岩石中に存在する割れやすい特殊の方向をいい、垂直でもっとも割れやすい面を俗に“一番”といい、一番に直角な他の垂直面を“二番”といった。

3、滋賀院門跡

坂本の町には、穴太積みの石垣が見事な里坊が数多く残っているが、中でも滋賀院門跡はひときわ背の高い石垣と白壁に囲まれて、延暦寺の本坊らしい堂々とした外構えを見せている。もともと京都の北白川にあった法勝寺（ほうしょうじ）を、江戸時代初期に現在地に移し、のち後水尾（ごみずのお）上皇から滋賀院の号を賜わった。江戸時代末まで天台座主（ざす）となった皇族代々の居所であったため高い格式を誇り、滋賀院門跡と呼ばれる様になった。

比叡山の延暦寺は環境が厳しく、60歳を過ぎた修行者は天台座主のゆるしを得て、麓の坂本に降りて里坊に住むという風ができた。近世以降は、座主も坂本の滋賀院に住むようになって、坂本が叡山の首都のようなかたちになった。

「里坊」とは、一般に延暦寺の僧侶が里に設けた院や坊のことを指すが、その機能は歴史とともに変化していった。往時の比叡山の修行は、厳しい自然との闘いでもあった。その厳しさに堪えられなくなった老僧や病弱の僧徒が隠居保養するため、天台座主から賜ったのが里坊だと言われている。

以上

歴文７月資料④

最澄と南都仏教

By:羽尻嵩

≪予備知識≫ ― 仏教の始まりから日本伝来まで ―

1. 仏陀とは

本名はガウタマ・シッダルタ。 前5世紀 インドの北のシャカ族の国の王子として誕生。 29歳で出家し、修行し、悟りを開き、多くの弟子を持ち、教えが広まる。 80歳で入滅。(シッダルタは、 のちに仏陀、シャカ などと呼ばれる)

2. 三蔵とは

仏陀入滅直後 弟子たちは仏陀の遺骨をストゥーパ(**塔**)に分骨し、 500 人の阿羅漢(仏陀の弟子の最高位の僧)が集まり、**仏陀の教えをまとめる編集会議(結集**けつじゅう**)を行う。**その教えが「**経典**」、僧や信者の決まりが「**戒律**」、経や律の研究が「**論**」となる(この3つを「**三蔵**」 という)。

3. 仏陀の教えとは

- **「人生は苦」であり、「苦からの脱却」がテーマである。**
- **「苦」の原因は「我執」 であり、 「我執」の原因は「無知(無明)」 である。**
- **「この世の法(真理)」とは、「諸行無常諸法無我の法」、「縁起の法」である。**
  これを悟ることのよって、「涅槃寂静」 の世界に入る。
- **「縁起」** この世に単独で成立しているものはない。空間的にも、時間的にも、いろんな関わりがあって個々のものは存在する。 従って、自分も単独で存在するのではなく、自分に執着していると真実は見えず、心が安らかになることはない。

4. 仏教教団の分裂 ・・・・ 大乗仏教と小乗仏教

- 仏陀は、相手に合わせて多くの法を説いた(これを「**方便**」という)。仏陀入滅 100 年後、教えの受取り方から、大きく「**上座部**」と「**大衆部**」の2つ分かれた。
- 「**大衆部**」では、少し規制を緩め、**衆生を助ける慈悲行(利他行)を大切にし、みんなで救われようとする教えを「大乗仏教」**と称して、 自分の悟りを優先する「**上座部**」の教えを「**小乗仏教**」と蔑視した。
- この頃から、大乗仏教 初期の仏教経典である**『般若経』『法華経』『華厳経』『浄土三部経』**が成立していく。

5、仏教の伝播 ・・・・・ 北伝仏教と南伝仏教

(1)北伝仏教

大乗仏教は、経典や仏像彫刻と共に、ガンダーラからシルクロードを経て、チベットや中国に伝わる。

・**1世紀**、インド北部の**ガンダーラで仏像作成が始まる**（ギリシア彫刻の影響）。
・**3世紀**、敦煌の**竺法護**（じく ほうご） が大乗仏教の経典を初めて漢訳。・**龍樹**（ナーガールジュナ）が、「**空の教え**」を中国に伝える。
・**4世紀始め**、「空」思想を深化させた**唯識思想**や衆生救済を説く**如来蔵思想**が中国に伝来する。
・**～5世紀** 西域から鳩摩羅什（くまらじゅ） らが中国に来て、 中国の法顕（ほっけん）はインドまで行き、中国での仏教の受容が本格的に始まる。
・**4世紀後半** 仏教が高句麗・百済に伝来する。

（2）南伝仏教＝上座部の仏教

大乗仏教を本道から外れていると批判。仏陀の教えを厳格に守り、スリランカからミャンマーやタイに伝わる。 崇拝される像はシャカ像のみである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

≪本論≫

1、日本への仏教伝来と南都仏教

（1）日本への仏教伝来から平城京遷都まで

・**538年 百済王が日本の飛鳥に仏像・仏具・経典を持ち来る。**
日本での仏教の受け入れは、**教えよりも仏像に関心があり、異国から来た神々の信仰として仏教の受入れが始まった。** 物部尾輿が受入れに反対したので、欽明天皇は蘇我稲目の別宅に仏像などを移した。 この別宅が、日本最初の寺の「向原寺」である。
・588 年 司馬達等（しばだっと）の娘の**善信尼**が戒律を学ぶため百済へ渡り、2年後に帰国
・593 年 **聖徳太子**摂政となる。 彼は熱心な仏教信仰を持ち、四天王寺、法隆寺などを建て、**法華経などの解説書**も書いたとされる。
・624年 **僧尼令で、僧尼の学問専念義務や肉食・婚姻の禁止**
律令体制が整うにつれ、僧尼や修行者は国の管轄に置かれていく（税逃れの私度僧尼などの取り締りなどが主なねらいであった）

・660 年 **道昭が入唐して法相宗を伝授され帰国。**（行基はこの道昭により得度を受けた）
・699 年 役行者 伊豆に流され**る**

(2) 南都仏教
・710年　平城京へ遷都
・740年　**華厳宗伝来**　741 年 国分寺・国分尼寺の詔。
・743年　聖武天皇が**大仏**（華厳宗の仏像、毘盧遮那仏びるしゃなぶつ）**建立の詔** 。
・753年　**鑑真来日**・・・11年間の努力が実り来日、僧尼向けの具足戒と授戒式を伝授する。 聖武天皇などには大乗戒も伝えたとされる。
・770年 道鏡 下野に流される。
光仁天皇は、天皇の安穏を祈らせるため、禁止されていた山林修行者を公認する。

(3) 南都六宗とは
宗派意識は弱かったが、次の六宗があった。
・三論宗（教理研究が中心）、成実宗（三論宗の付宗）、**法相宗**、倶舎宗（法相宗の付宗）、**華厳宗**、**律宗**（戒律の研究が中心、鑑真創立の唐招提寺）。
・現在残っているのは「**法相宗**」、「**華厳宗**」、「**律宗**」の3宗派のみである。

①法相宗
4世紀にインドから中国に伝わった仏教の唯識思想は、法相宗の教えとして**道昭**によって日本に伝えられ、**飛鳥時代末から奈良時代にかけて、元興寺や興福寺、大安寺などで広まり、奈良では最も大きな影響力を持った。**

・唯識思想
龍樹（前述）の「空」の思想を受け継ぎながらも、「識（心の動き）」は仮に存在するとして、次のような優れた見方を示している。 →“人間の心の動きは、「五感」とそれに反応する「意識」だが、心の深層には「無意識」の働きがあり、それらの動きによって、あらゆる判断がなされている。
したがって、全ての現象は人間個人の主観的な「識」にすぎないのに、人間はそれに執着して悩み苦しんでいる。その歪んだ心を正すためには、学問によって真理を学び、ヨーガの行で 「識」をコントロールしていくことが必要だ。

・五姓各別説・・・ “この世には五種類の能力の人間がいる。 成仏できる資質のある「菩薩」、独力で悟りに近づける「独覚」、僧侶の教えを受けて悟りに近づける「声聞」、成仏の可能性が定まっていない「不定」、成仏の可能性のない「無種」で、 確実に悟りに到達できるのは「菩薩」だけで、「独覚」「声聞」の悟りは自利行なので、成仏できない。 また、菩薩になれる能力があっても、菩薩になるためには永遠に近い年月の修行が必要である。“

このような「五姓各別説」の人間観は、人間の多様性をとらえ、現実的見方であるが、最澄はのちに、法華経でいう「一切衆生悉有仏性」という如来像思想や「一乗思想」から懸離れているとして、法相宗の徳一と論争繰返すことになる。

②華厳宗

東大寺に招かれた審祥（しんしょう）が伝えた。

・「一即多」の世界観

この世に存在するあらゆるものは、それぞれが相互依存の関係にあり、「一つは全ての中に、全ては一つの中に」 観ることができる。この世はそのような調和と秩序のあるマンダラの世界である。

・聖武天皇は秩序ある平和な国造りをめざして、この教えを国造りに利用しようとして、全国に国分寺・国分尼寺を置き、東大寺に毘盧遮那仏を造らせた。

③南都六宗の特徴

・経典、戒律の学問仏教で、 布教や信仰目的の儀式や葬儀は行わなかった。

・天皇を中心とした国家の繁栄を求める鎮護国家仏教という傾向が強い。

（行基のように民衆の中に入っていった例外もあるが）

2、最澄の生涯と思想

（1） 最澄の歩んだ道

・767 年 最澄誕生。 今回訪問する坂本の生源寺のある場所で生まれたとされる。幼名は三野首広野（みつのおびとひろの）。 父は中国の後漢の皇帝の子孫で、日本に渡来した登万貴王の末裔といわれる。

・778 年 14歳で得度

12歳で、近江国国分寺 行表（ぎょうひょう）の弟子となり、14 歳 で得度（出家）する。 得度するに当たっては、「法華経」「薬師経」「最勝王経」「金剛般若経」などを読んだといわれる。

「法華経」は、後に天台仏教の中心に置かれたお経。勝王経」は初期の密教経典、「金剛般若経」は禅宗の経典の1つ。 行表は唐から来日した道璿(どうせん)から戒律、禅の修行、華厳・天台の教えを学び、最澄にも伝えた。また吉野にあった寺にも入り、 修験者にも影響を与えたともいわれる。

・785 年4月 6 日 最澄 19 歳、具足戒を受戒

東大寺で具足戒（国家認定の僧となる戒律）を授かる。

・同年 7 月 17 日 修行のために一人で比叡山に入る。

自分の行いを懺悔し、仏陀と同じような感覚を持つまでは山を下りないとの願をかけ、厳しい修行に入る （最澄願文）。特に「法華経」の教えと「止観」の実践をベースにした中国の天台智顗（ちぎ）の教えを研究し、独自の思想を深める。

・なぜ、彼は約束された比丘の地位を捨てて、深山での修行に入ったのか。

南都仏教が学問仏教になり、また小乗的な仏教になっていることへの強い疑問を持ち、民衆の救いを念頭におく実践仏教求めた。

・788 年 最澄22歳。 叡山に一乗止観院を建立

今の延暦寺の根本中堂のあたり。彼は彫った木像の薬師如来像の前に法灯を供えた。

・791 年 宮廷の「内供部十禅師」に任命される。

南都の仏教勢力から遠ざかるため平安京に遷都を指示していた桓武天皇は、在来の仏教を批判した最澄の考え方に共感し、信任したものと思われる。また比叡山は都の鬼門に当たり、その鎮護の寺とされた。794 年 平安京へ遷都。

・802 年 「天台三大部」 を講じる（36 歳）。

高雄山寺で南都六宗の僧を集めて、法華経など 「天台三大部」 を講義する。

・804 年 短期の請益僧として入唐。（空海は長期の留学僧であった）

・805 年 中国天台山にて、天台・戒律・密教・禅の4つの思想を学び（四宗合一）、

翌年帰国する。

（注）

最澄は、国の請益僧であったため、わずか約半年という短期間ですべてを学ばなくてはならず、密教の学習は、帰国間際にならざるを得なかった。（空海は、20年間という期間を与えられた留学僧であり、密教の全てを学んだ）

・806 年　日本天台法華宗の公認

天台宗に、年2名の国家認定の僧侶を出すこと(年分度者)が認められた。

・812 年　空海から、高雄山寺で金剛界の灌頂（かんじょう）を受ける。

・818年　具足戒を破棄。朝廷へ叡山に戒壇院設立の許可願いを出す

『山家学生式』（さんげがくしょうしき）を定め、天台宗の修行僧を比叡山において受戒させた後、12 年間山中で修行することを義務づけることを定める。

・822 年 最澄 没（56 歳）

死後、叡山の戒壇院設立の許可がおりる。（戒壇院の設立によって、東大寺に頼らずに自分の弟子たちを正式な僧侶にできる道が開けた）

・823年　名称を「延暦寺」とする。

「延暦寺」とは単独の堂宇の名称ではなく、比叡山の山上から東の山麓にかけての堂塔の総称である。（現在では、東塔、西塔、横川などの区域に所在に 150 ほどの塔や堂がある）

(2) 最澄の思想

最澄は、若いときから、日本古来の山岳信仰に触れ、得度してからは様々な経典を読み、師の行表からは、戒律、禅の修行、華厳の教え、天台の教えを学んだ。

唐に留学した際には、まず中国天台山に登り、法華経の教えと止観の修行を学び、その後、禅宗や前から関心のあった密教を学び帰国した。

延暦 20 年、高雄山寺において南都六宗の学僧を集め、「天台三大部」の講義を行い、朝廷からその出来栄えを嘉賞されたといわれる。

以上のように、最澄は多様な思想経歴を持ち、その特徴を簡潔にまとめるのは難しいことではあるが、あえて次の**2点**にまとめてみた。

① 一乗仏教の思想

当時の南都の法相宗などは、修行僧の中で、悟りに至る人（菩薩）と悟りに至れない人（独覚や声聞）がいるとする小乗仏教的な教えとっていたが、最澄は、そのような見方を法華経の中の仏陀の話から強く批判した。

法華経の中に書かれている仏陀の話によると、「修行僧は千差万別であり、悟りに至る道も千差万別である。仏陀は、そこで方便として、それぞれの修行僧に合わせた「真理に至る道」を説いたが、みな同じ悟りに至ることができたという。
したがって、「声聞」や「独覚」の徒も、修行の過程の違いはあるが、最終的には「菩薩」と同じ悟りに至ることができるとするのが、一乗の思想である。

彼はこの修行道を「一乗止観」と名付け、一乗戒の円頓戒（えんとんかい）を授ける「戒壇院」を造った。このように最澄が果たした最も大きな業績は、一乗思想を広め、多くの修行僧に、修行において何大切かということをはっきりと示したことである。

② 総合仏教（四教合一）の思想

最澄の仏教は **円（法華経）・ 禅（止観）・ 戒（大乗戒）・密（台密） の4つ教えが融合する仏教といわれるが、もう一つ、自然信仰を付け加えておきたい。** そして、このような総合的に仏教を捉えようとする最澄の姿勢が、後に、円仁が浄土教を持込み、鎌倉時代にいろんな教えが花開くことにも繋がったといえる。

・「禅」

「止観業」ともいう。心を静め、智慧を研ぎ澄ます坐禅をさす。

・「密」

密教のことで、「遮那業」ともいう。身と口と意の行為による真言念誦を指し、即身成仏を目指す。 最澄は、密教に関心を持っていたが、中国留学は短期であったため、十分学習できなかった。帰国後、空海に教えを請うが、天台宗の教えは顕教であり、密教とは異質な教えであるとして拒絶された。これ以降、２人は絶縁することになる。

しかし、最澄は密教をあきらめず、「山家学生式」にも、叡山で修行する者は止観業か遮那業のいずれかを専攻することと定めた。

・「戒」

戒律のことで、最澄は、南都仏教の**具足戒**を小乗の戒律だとして廃止し、それ

に代わる一乗戒の**円頓戒**えんとんかいを示した。**円頓戒**は、250の戒律を定めた南都仏教の具足戒に比べて、**十重四十八軽戒**と数も少なく、かり易いものになっている。

十重戒・・・　不殺・不盗・不淫・不妄語・不酤酒・自慢せず・他人の悪口を言わない・物惜しみをしない・怒らない・仏法僧の悪口を言わない。この戒律は、在家者向きの戒も入っていて、自律であって、他から罰せられる対象ではなかった。

・ **自然信仰**

古来、吉野・大峰から高野の山々では山岳信仰の修行が行われてきたが、最澄も十代初めから山林修行者との交流を持っていた。

彼の「**山川草木悉皆仏性**」という**自然界にあるすべてのものにまで仏性を見る**発想は、日本古来の自然信仰を受継いでいて、空海と共に、修験道や神仏習合思想に大きな影響を与えた。

（「山家学生式」より）

“国宝とは何物ぞ。宝とは道心なり。　中略　古人の言わく、経寸十枚、是れ国宝に非ず、一隅を照らす、此れ則ち国宝なり”

3、 最澄以降の天台宗と日本仏教

①最澄の後継者たち

第3代座主　・・・　円仁は、横川地域を開き、浄土宗を持ち込む。

第5代座主　・・・　円珍は、台密教 「台密」を確立する。

などが最澄の遺志を継ぎ、教義の発展と布教に尽力した。

②山門派と寺門派に分裂

・円珍の没後の 993 年、この両者の弟子が対立し、円珍派は比叡山を下り、園城寺(**三井寺**)に拠点を移し、**天台宗は山門派(円仁派)と寺門派(円珍派)**にわかれることになった。

・**第18代座主・・・良源（慈恵（じえ）大師、元三（がんざん）大師）、伽藍の復興や規律の維持。**

・**弟子の源信（恵心僧都）・・・『往生要集』を著し、浄土教の基礎を作る。**

③鎌倉時代・・・大衆仏教へ

天台宗では、延暦寺で学んだ僧の中から、民衆のために易行を説く仏教指導者たちが出てきた。 法然（専修念仏）、親鸞（悪人正機説．妻帯）、 栄西（坐禅と公案） 道元（只管打坐）、 日蓮（法華経重視）。

他方、奈良の律宗、華厳宗、法相宗も真言宗と結びつき、民衆への実践を重視して復興していった。（西大寺の叡尊は真言律宗を開く）

④室町・戦国時代

天台宗は朝廷や大名などの権力争いに関わり、しばしば寺院などが焼き討ちされた。（最大のものが織田信長の叡山焼き討ちである）

⑤江戸時代

仏教は、寺請制度により、幕府の統制下に置かれ、活性化が失われていった。

⑥明治時代～現代

1868年 神仏分離令で、請制度・宗門人別帳は廃止され、寺の機能は葬儀法要だけが残された。 1872年 肉食妻帯自由令。蓄髪・法要以外での平服着用令。

今の延暦寺では、午前中は、法華経の読誦を中心とした行法を、午後は阿弥陀仏を本尊とする行法を行う。 また、遮那業として、天台密教（台密）などの加持も行う。 さらに、最澄の山籠りの心を受け継ぐ十二年籠山行、 峰々を巡る回峰行も行われている。”

≪参考文など≫

最澄の代表著書に『山家学生式』『顕戒論』『法華秀句』がある。

『現代語の法華経 』庭野日敬　『日本の名著 最澄/空海』中央公論社
『日本仏教史』末木文美士　『日本人の仏教』1~10 東京書籍
『最澄と空海』梅原猛　『最澄と空海』立川武蔵
『最澄（1）（2）』栗田勇　『イラスト・仏教入門』（文）渡辺昭敬、（絵）井上球二
Wikipedia　など

奈良・人と自然の会

７月歴文クラブ研修会　参加者名簿　H30.7.10(火)

番号	お名前	参加料	出欠	担当
No.1	青木 幸子	４０００円		事務局
No.2	池田 富子	４０００円		
No.3	上西 千代子	４０００円		
No.4	内河 洋文	４０００円		
No.5	太田 和則	４０００円		
No.6	小田 久美子	４０００円		
No.7	小田 進八郎	４０００円		
No.8	川岸 次郎	４０００円		
No.9	川岸 美子	４０００円		
No.10	岸谷 和代	４０００円		
No.11	櫻木 晴代	４０００円		
No.12	田代 一行	４０００円		世話人
No.13	田積 彰男	４０００円		世話人
No.14	寺田　孝	４０００円		
No.15	永井 幸次	４０００円		
No.16	中川　徹	４０００円		
No.17	中西 光子	４０００円		
No.18	西谷 範子	４０００円		
No.19	羽尻 嵩	４０００円		世話人
No.20	坂東 久平	４０００円		
No.21	坂東 由紀子	４０００円		
No.22	福田　美伸	４０００円		
No.23	古川 祐司	４０００円		代表
No.24	松尾　弘	４０００円		
No.25	八木 順一	４０００円		世話人
No.26	山本 妙子	４０００円		
No.27	山本 美智子	４０００円		
No.28	弓場 厚次	４０００円		

合計（２８人）　１１２０００円